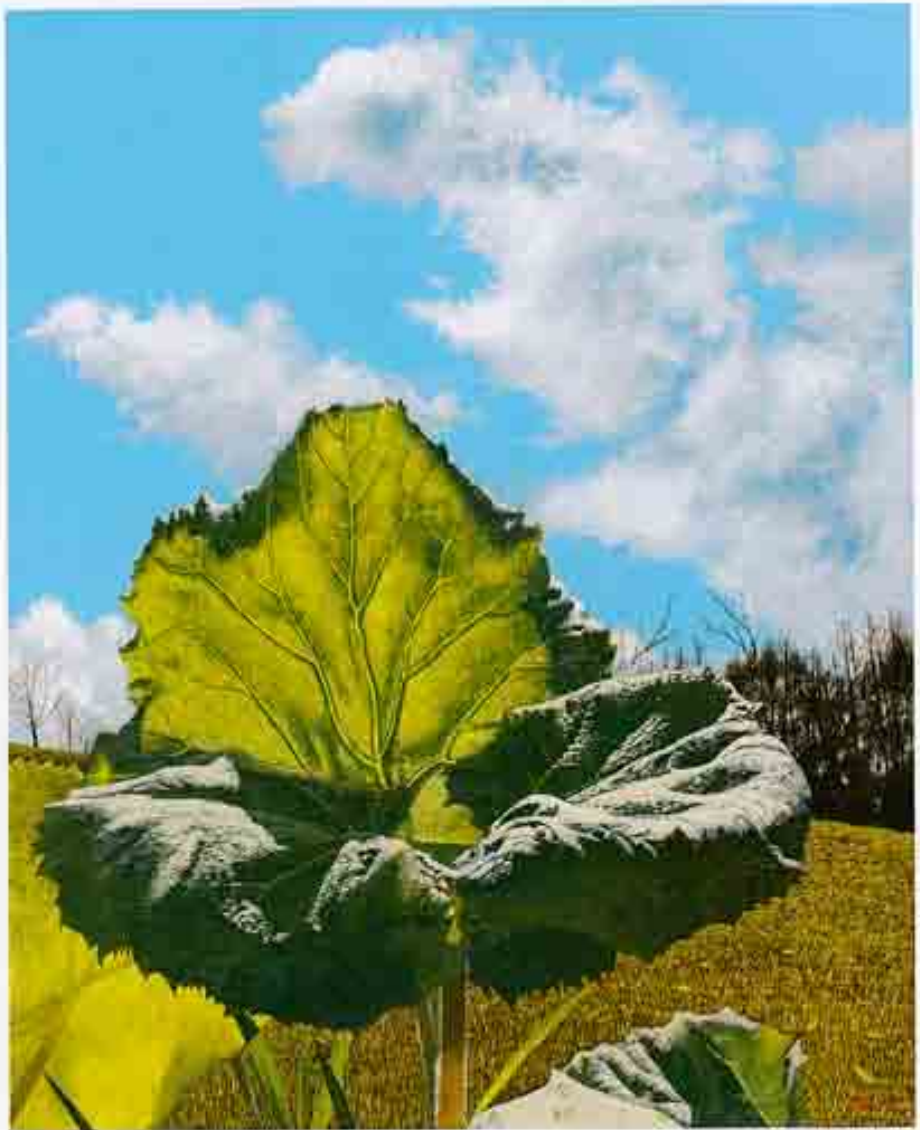


大正十二年一月十七日創刊
昭和三年四月一日発行
昭和二十三年二月七日創刊
第九十九巻 第四号

木酔馬

4 月



岩たばこ萌えたる下に迎へらる

秋櫻子

『餘生』

陶芸家富本憲吉との交流は深く、「白磁出窯」など窯明けを詠んだ句のほか随筆もある。また選集の五巻には評伝も収められており、そのために大和安堵村を訪ねてもいる。この句は画家小倉遊亀邸での作。遊亀は憲吉夫人の一枝とは友人で、祖師谷での窯明けには毎回案内があったという。遠い日お互いにそれとは知らず同じ場所に居て、後年憲吉を偲び思い出話をするのも縁であろう。

小野恵美子

信

徳田千鶴子



嫁ぐ子の打明け話灯の朧

雛百段それぞれ違ふ物思ひ

上がり目下がり目子どもらと雛かざる

風に香を移し清しき三葉芹

揺り椅子の覚ます思ひ出うららけし

理に適はざること耳に余寒なほ

蝶生る今日より明日を信じたく

四月集



啓 蟄 森 藤 千 鶴

花種を蒔く楽しさの暮るるまで
花菜畑先行く友に追ひ付けず
野火止の道跳び歩く鴉かな
啓蟄や子らラジコンを飛ばしつつ
声立ててて嬰子の笑ふ雛まつり

七つ星 平田はつみ

海坂の紺敷きつめて成人日
流木の焚火へ迫る波のこゑ
ふくろふの森へ傾く七つ星
露の臺分けて童話の会始む
写生子の画紙をはみだす涅槃像

春の虹 石川 倜 子

有明の月しろじろと春の雁
咲き満ちて梅に潮騒はるかなり
茶畑の起伏やはらか春の虹
春暖炉囲む一会の旅の宿
捨て舟に夕日とどむる鴨の陣

弘法麦 徳 井 節 子

落葉松や降る雪の黙極まれる
行年の両手囲みにマッチの火
寒雀墓碑それぞれに日の差して
火渡りの十歩息災小正月
男浪打つ弘法麦の万の芽よ

三河花祭 間 宮 あ や 子

草鞋の緒切れてなほ舞ふ花まつり
鬼の面脱げば紅顔花まつり
潮鳴りを力としつつ鋏始
相弟子へ所作改まる初茶の湯
入日いま凍雲沖に燃えたてり

四旬節 壺 井 久 子

豆撒くやオリーブ畑の闇目掛け
春コート探して努む友の葬
春疾風物干竿はいづれへぞ
立春やきくきくきくと首鳴りて
四旬節われ弱くとも主は強し

コロナウイルスの蔓延が、じわじわと身近にも影響してきました。他人事と思っていました。私の住む地の病院の医師が陽性と判定されたり、俳人協会の三月三日の総会の後の懇親会が中止になったり。東京例会を始め、幾つもの句会が中止となりました。

まさかとは思いますが、高齢者が危ないと云われては、用心にこした事はないですものね。

今月の投句に多かったのは、初場所の小兵力士と割烹着の句。小兵力士とは炎鵬でしょうか。阿炎を持ち上げたのはびっくり。今の時代、着物姿で働くことは殆どないので、エプロンはあっても割烹着姿は見ないのですが、何とも懐かしい。俳句に見えてくる景は、今も過去でも鮮かです。

島裏の牡蠣打小屋も輪飾りす 谷 陽右

広島廿日市にお住みの谷氏。題材を沢山お持ちだ。この島は宮島だろうか。私、来世広島に生まれたら牡蠣打女になれるかもしれない。殻をこじあけるのは、結構得意なので。この句〈島裏〉が効いていると思う。正月を迎へる大切な行事も、最近は疎かになりがち。〈輪飾り〉の景が見える。

雪乞ひの禱りの列にゆきをんな 西川 麻規

地球の温暖化だろうか、日本を暖冬に。私にとってはありがたいようだが、農作業への影響は大きい。四季のある日本の従来の営みの変化をよぎなくされてしまうとしたら深刻だ。雪乞ひの行列の中に〈ゆきをんな〉がいるという発想、面白い。

手のひらに墓のぬくもり笹子鳴く 土手 晶子

少し言葉が多いかもしれない。しかし内容がいい。墓に詣でた時の姿勢がうかがえる。下五は先祖との交流のように思う。

御慶受く笑ひ上手の長寿眉 池野つむぎ

何だか楽しい句。めでたい言葉が並ぶ。そうか、笑うのって大切ね。やはり中七の措辞が句をふくらます。めでたさを皆で喜んでる様子が見えてくる。

抱くための二本の腕春待てる 鈴木 純子

孫はかわいい、間違いない抱きたい。抱きたくて待っているばあばの姿が浮かぶ。初めての孫かもしれないし、何人目でも嬉しい。私は腰が危ないので、ワーと走ってきたらちよつと心配。でも腰くだけでも抱きとめたい。出産の春を待つ気持、何より。

走り根に月光凍つる修験道 米山のり子

厳しい修業の姿が見える。役小角を祖とする山岳信仰の一つだろうか。自然との一体化を重視する修験道。熊野から峰に入る僧の姿をドキュメンタリーで見たことがある。厳しさに耐えてこそその修業だが、並大抵の話ではない。〈月光凍つる〉がその厳しさを伝える。

攻め焚きの焰に白き寒の月 近藤 悦子

ご自身も陶器作りをなさると聞く悦子さん。焰の赤さと月の白さを上手に詠まれた。

馬酔木集

徳田千鶴子 選



島裏の牡蠣打小屋も輪飾りす
神宿る島を鷹舞ふ初御空
普段着にもどれる巫女の四日かな
回礼に木屑こぼして彫師来る

廿日市谷 陽右

手のひらに墓のぬくもり笹子鳴く
鶴唳の笹澄みある棚田かな
風鎮の房を金茶に鏡餅
足もとの日差やはらか機始

山口土手 晶子

初日かなカルデラ一枚照らし上ぐ
雪乞ひの禱りの列にゆきをんな
信仰といふには遠く初山河
寒林やいのちまつすぐ呼吸する

熊本 西川 麻規

御慶受く笑ひ上手の長寿眉
梁高き旅籠に揺るる餅の花
白光の富士を車窓に恵方道
柗咲く間口の広き懺悔堂

広島 池野つむぎ

数へ日やはたらく性を授かりて
初明り白山讃へ祖を讃へ
左義長の真火に男神の立ち上がる
子を送る門に遠山明の雪

白山宮口 征子

負けん気の子らに交はり歌留多取
しあはせの根つ子の太し福寿草
ほろ酔ひのわれに蹤き来る雪女
手の平に均す陶土や春近し

西宮 大杉 映美

風雪十五句 千鶴子選

妙義嶺の氷刃照らす八日月	半田順子
竜神も眠り深山の滝凍る	夏生一暁
初音せり紅絹に塗椀拭きをれば	佐藤保子
足音にある廻廊の余寒かな	馬屋原純子
たどりきし道はかほどか蜷の道	渡邊英子
青き踏む古墳の眠り覚ますまじ	丸山美奈子
軒つらら消ゆ留守電に父の声	岡汀子
明日咲かむ梅の蕾の息づかひ	坂本玲子
星明り亡き子を胸に行く枯野	倉科紫光
供花の無き塚に落花の紅椿	中村佳子
切れ切れの刻をつなぎて毛糸編	村上絢子
天心の月に濡れある鳥総松	河野亘子
お互ひに先に逝くなと薺粥	升田義次
風花の一片父の文として	田中由喜子
寒北斗ひとりと云ふは泳ぐごと	斉藤玲子